

## 80年代の小説にみる中国社会の問題点 その二

堀 黎 美

### Reflex of the Chinese Social Problems on the Contemporary Chinese Literature Part 2

Reimi HORI

For some leaders in China self interest take precedence and others cannot break free from Dogma. Both these leaders restrict the peoples freedom. This paper takes up the state of affairs of the leaders.

梶 梶

前回、現代化の周辺と題して領導幹部像を何人か取り上げたが、その後更に数10篇の作品を読み足していく過程で気づいたものが私の内部で次第に大きくなり、それを放置して他の問題に移るのは不自然なので引き続き領導幹部に関して書いてみたい。

気づいた点の1。前回述べた如く優秀作の評価を得た小説中から今日の中国が抱える問題を見るという方法を私はとっており、そうして読んだ200余篇の作品中領導幹部との関わりを描いたものが圧倒的多数を占めること。これは中国人の生活に公私にわたり全生活的に領導の存在が如何に大きいかを示している。

2. 善きにつけ悪しきにつけ登場する領導が殆んど末端管理職であること。私の視野がまだ狭いせいもあるが、行政の末端で日常生活に直接関係する場よりもっと上級の、政策を立案し最終的に責任を負うべき所にまでは筆が絶対に及ばない点。この辺の関係は綱引きを見る如く、作家の筆がどこまで及んだかが自由化、現代化がどこまで達したかを示す目途でもある。国家の最高指導者級にまで及んだ時こそ社会の安定ぶりを示すと思うのだが。

3. 登場する領導像は「奴隸の言葉」で描かれているのではないか。中国語に轉弯抹角という語がある。率直とか単刀直入の反対で婉曲、遠回しの意味である。中国は歴史の古い国であるから婉曲表現の技術にも勿論長けており、物事を二重三重に理解していかないと本質に迫るのが難しい。常に言葉の背後の意味も察知しなければならない。書き手にとっては身の破滅を招かないよう表現法に磨きをかける必要がある。過去に何度も文芸作品が故意に曲解され、あるいは枝葉末節が問題になって批判されている。古典でさえ政治に利用されて“大毒草”などと鞭打たれることがある。古典の場合は作者はすでにこの世にいないから後世にどのように罵倒されても別に

痛痒を感じないだろうが、作家がおのが鋭い感性によって世の真実、矛盾を描く存在であるならば、より優れた作家ほどより本質を抉るであろう。その場合問題の提起が時の権力の意に添わなければ「文芸は政治に奉仕する」国ではあっても、自分の命で償わねばならない罪を犯したことになるのだろうか。命を奪われないまでも例えば丁玲女史（1907—1986戦前からの共産党員でスターリン賞受賞）の如きは58年反右派斗争の時右派とされ、以後約20年近くペンを奪われ強制労働等させられていた。名誉回復後の79年に私は直接女史に奪われた時間についてお訊ねした際女史は「長生きしてその時間を取り戻す」と答えられたが、40代後半からの作家として最も脂の乗りきった仕事をするべき20年を遂に取り戻し得ず86年3月亡くなられた。名誉は回復されても、失われた時間は誰が償うことができよう。

現在活発な創作活動を行っている張賢亮氏（1936—）も、20歳前後に発表した詩の語句が当局の忌諱に触れ、労働改造及びそれに類する作業で約20年間自由を奪われたままだった。彼は若かったから名誉回復後どんどん作品を発表しているのは不幸中の幸いである。

こうした多くの例を間近に見ながら執筆を志すならば、1. 権力の喜びそうなものを書く。2. 亡命するか信頼できる仲間うちのみに発表する。3. 逃げ道を残して書く、以外方法があるだろうか。断定は避け、玉虫色に表現し、結論は読者にまかせる向きの作品が多いのは事実である。従ってその辺を斟酌し轉弯抹角的手法で書かれたものはそのように読まねばなるまい。多くの作品に登場する領導を独立した造型と見ず、かかる領導まで存在させている体制を告発していると読むべきであろう。そうすることにより“桑樹坪記事”や“秋天的憤怒”の恐しさ、“井”や“瓜棚風月”の苛立たしさが外国人読者の身にも迫ってくるのである。上記諸作はいずれも中篇でかなり長いので1篇のみ簡単に紹介する。本文は約8万6千字である。

### 秋天的憤怒

肖玉徳が育てた孫娘小織とその夫李芒は、肖玉徳の死を機に合作していた小織の父肖万昌と手を切る決意をする。肖万昌は村一番の権力者ですでに30余年を村の領導として過してきた。今は書記の仕事のほか李芒と煙草畑を請負い耕作しているが、両者間には長い残酷な歴史があった。

李芒は祖父が地主だったため物心つく頃は孤児だったにもかかわらず高校進学資格を与えられず、中卒後村人の監督の下に労働に明け暮れていたが、そんな生活の3年目に政策が変わって高校に行けるようになり、そこで小織と会い卒業後一緒に帰村した。娘との交際を肖万昌が勿論許す訳がない。李芒が地主階級出身であるため陰に陽に辱しめ労役にかこつけての事故死さえ企む。それでも諦めないのを知ると手下の民兵連長を使って2人を待ち伏せ帆布でぐるぐる巻きにし小織は家に監禁し、李芒は山中の使用していないアンモニア倉庫に閉じこめて痛めつける。民兵連長は微笑を絶やさないサディストでかねてより小織にねっとりした視線を這わせている。李芒は危うく撲殺されるところを小織の懇願をいれた玉徳爺に救われた。若い2人は追手を恐れそのまま逃亡生活を続け苦勞を重ね東北に流れついた時、親切なる莫合爺に出会って煙草栽培技術を徹底的に仕込まれる。郷里を出て10数年経っていた。ある日偶然同郷の人に出会い、郷里も変化し田

畑の請負制も始ったと聞き様子を見に戻ってくる。肖万昌は2人の帰村を許さずすでに戸籍も抹消してしまったと断るが、玉徳爺は2人の帰村を強く望み肖万昌に土下座して戸籍の復活を頼む。肖万昌も実父の願いは無視できず若い2人も命の恩人の願いをいれ村で暮すことになる。2人は煙草栽培技術を村人にも教えるがその成果はすべて肖万昌に横取りされてしまう。彼は農民に渡すべき肥料を隠匿し給水権もすべて握っている。このような経緯を経て玉徳爺の死を機に李芒は肖万昌と手を切るのみでなく、彼を倒す決心をする。

合作を解消した李芒に畑への給水を止めるなど肖万昌はあの手この手の妨害をする。肖万昌に痛めつけられ、うまい汁を吸われながら、李芒が迫害されるのを面白がって見ている村人に深く失望しながらも、煙草の収穫を目前に李芒は彼らを手伝い彼らの前で肖万昌の罪状を読み上げる。

「この村の権力は愚昧、狡猾、すでに変質しているのに常に正義は自分にあるかの如く振舞う男の手に握られている。村の権力がこのような人間に集中していること、それにも増して問題なのはそれが農民の解放を阻害し、幸福を破壊し、すでに農村の新しい桎梏となっている事実である……。」（P 498）こうして李芒は一步一步着実に肖万昌を追いつめていく。

大筋のみ追ったため肖万昌の恐ろしさがはっきり出せないが、彼の残酷な性格を示す多くのエピソードが本文中には語られている。

中国は広く文盲もまだ多い。情報の伝達、交通や通信の手段も限られた地域で長年特定の人間に権力が集中すれば、独立王国となる可能性は大である。解放前の地主は極悪非道呼ばわりされているが、肖万昌が貧農出身の共産党員だったとしてもその行為は極悪非道の旧地主となんら変わることはない。

肖万昌を追いつめていく李芒には、例によって彼を支持する上級の存在が出現し、いずれ近い将来肖万昌は失脚するであろうことが暗示されているけれども、上級が肖万昌と結託している場合、或いは肖万昌が更に上級にも存在している場合、無名の李芒はどうすれば生き延びられるだろう。

だがこの恐ろしさは、肖万昌に向けられるより特定の個人が数10年も権力の座に居坐る制度に向けられるべきではあるまいか。肖万昌の君臨する村にもこれまで対立候補なしの形式のみの選挙は行われたかもしれないが、三権分立は資本主義的として採用しない社会であるならば尚更、少くとも多選を制限し、対立候補や投票人の安全を保障する制度があれば、村人に対する文字通り生殺与奪の権を肖万昌が数10年も一手に握り続けるのは避けられたのではなかろうか。これは村以外の場でも同じことがいえよう。肖万昌の如き存在は「農村の新しい桎梏となっている」と李芒に言わせているが、つぎに紹介するのも肖万昌とは違った意味で農村の桎梏となっていた領導である。約1万3千字の短篇で、解放後の農村の歴史が分り易く描かれているからほぼ全訳してみた。

## 満 票

(人民公社の解体につれ)模範(生産)大隊何家坪は村民大会を開き村長を選挙することになった。大隊長何老十は人民の模範と仰がれてきた人物で、30数年来一貫して先憂後樂を唱え、その清廉潔白ぶりは麦藁1本さえ私したことがないほどである。彼は選挙の前に「模範大隊をば模範村に変えようではないか」と抱負を述べ、それを聞いた村人は全員拍手して引き続き何老十に村長をやって貰おうと言いつつ。選挙が終り王支部書記が票を読み上げると何老十の得票は2票のみ。それを聞いた人々は気が咎めるのかうなだれ顔を赤らめ、泣き出す者さえいた。

何老十は呆然とし、踵のすり減ったボロ靴を引きずり王支書の後についてよろよろと立ち去った。今が昼なのか夜なのか、夢か現実かも分らなかった。

解放前の彼は作男だった。いつも黙々と人に従って働き、偉くなろうなどとは夢にも考えない人間だった。それが土地分配の際残りくじを引いたら譬え通り福があり瓦屋根の家と大きな牛が当たった。くじ運のよかった者と悪かった者の間で争いが起りその時何老十は大きなため息と共にこう言った。「よせよせ、旧社会じゃ何一つ当らなかったのを考えろ、けんかは止めろ、俺はボロ屋と小牛で十分じゃ」この言葉で争いは収まり、この言葉で彼は全県の模範となり、この言葉は全県人の銘記するところとなった。そしてこの言葉のお蔭で農会主席の栄誉は彼の頭上に輝き、その後の情勢の推移に従い農会、小郷、合作社、生産大隊と組織の名が変わるたびに彼が選ばれ農会主席、郷長、社長、大隊長と変ったのである。彼は勿論年をとったけれども「亀の甲より年の功、若い者にはとても代われるものではない」と人は言い自分でもそう思い失脚など夢にも思わなかった。その夢にも思わなかったことが起った。だからこれはきっと夢に違いない。彼は夢遊病者のように王支書に従って村政府に戻って来た。机を隔て真白な頭髪と顎髭、顔中の深い皺、戸惑いと苦痛を湛えた眼、汚れた古い綿入の上着、腰には皮紐の何老十を見ていると王支書は何とも言い難い気持になってきた。彼が小学生の頃から何老十の様子は全然変わっていない。50年代、60年代、70年代を通じて服につき当てが増えただけだ。諺に言う“犬はボロ籠に咬みつきの人は金持を敬う”を思わずにいられない。但しこれは旧社会での話。新社会になると“犬は金持に咬みつきの人はボロ籠を敬う”と変った。人は古い汚れた服を着ていれば品行方正で思想も正しいと見做され入党にも優先権が与えられた。ちょっと身装がよいと資本主義に汚染されているとされたから、入党を考えるならばまず汚い服を着なければ絶対駄目だった。貧乏でなければ地主や資本家と同じという訳である。従って何老十の服装はマルクス・レーニン主義の精髓と見做されたのである。かつて共に県の会議に出席した折、何老十は夜中に王支書を叩き起して言ったことがある「近頃の若者はおしゃればかりしたがる。このままではどうなる？何家坪は県の模範大隊なのだから旧社会の苦しさを忘れないために全員憶苦衣を着るよう提唱したらどうだろう？」「いっそのことあっさり旧社会に戻った方がよかろうに」と王支書は眠ったふりをしながら内心ばやいたのである。「ああ、若い衆は全く心配りが足らん」とため息をつきながら何老十はこの計画を練り上げ、上部機関の参同を得て遂に偉大な計画を実現させてしまった。大晦日、人々は憶苦衣

を着憶苦飯を食べ「旧社会がまた戻って来た！」と老人は泣き子供は笑い、どの家でも怒り罵倒しあい祝日の気分は全く白けたものになった。上級機関、記者、その他多勢の人がやって来た。皆内心どう思ったかは不明だが人々の顔には一様に悲哀の色があった。何老十は泣き男の如く泣いて旧社会の苦しさを訴え、彼の綿入の上着は大小の指導者や記者にほめたたえられた。（＊直接関係はないが筆者も以前ぼろの綿入を賛美した詩を詠じたことがある）彼はこの綿入を着て登場し30余年を隔てこの綿入のまま退場するのである。

何老十は背後の壁一杯に貼られた賞状に目をやった。すべてが彼の奮斗史であり功績の記録である。土地改革（＊地主所有の土地を分けた）に始まり、鎮反（＊反革命鎮圧）、統購統銷（＊国家による食糧一括買上販売）、合作化（＊農業の大規模集団化）、大躍進（＊増産運動だが無理があり多数の餓死者が出る）、公社化（＊農業の大規模集団化）、大煉鋼鐵（＊至る所で鋼鐵を生産する運動）、大辨食堂（＊集団給食、各家庭での炊事はできない）、学習毛著（＊毛主席の著書を学習する）、清理階級隊伍（＊旧地主階級出身者達とすべてにわたり一線を画する）、貧下中農管理学校（＊貧農下層中農だけが正しくすべてを彼らに頼らねばならない）、批林批孔（＊孔子、林彪を批判する）、計画生育（＊子供は一人しか生めない）などなど（＊以下略）。

何老十は常に表彰され、大小さまざまな数えきれない旗やら賞状やら30数年の歴史が壁に貼ってある。これらの賞状類がもたらしたものは何だったのだろうか。喜びか苦しみか、どれが人々に喜びを運びどれが苦痛をもたらしたのか、恐らく同じ1枚の賞状にある人は笑いある人は泣いたであろう。喜んだにしろ苦しんだにしろ誰にも先見の明がなかった訳だし、いずれにせよ何家坪は絶えず栄光に包まれかつまた絶えず激動していたのである。何老十はその1枚1枚の賞状を傷ついた辛い思いで見つめた。これらの賞状の為に彼は生涯の大部分を捧げ、自分は何一つ私せず血と汗をもって無数の栄光を獲得してきたのに、何家坪がたったの2票で彼に報いようとは。どうしてかかる結果になったのかいくら考えても分らず「俺はどんな誤りを犯したのだろうか、何か村の衆に済まんことをしたのだろうか」と呟いた。これは開票後彼が発した最初の言葉である。王支書はその気持がよく分った。「何を言うんですか、あなたの功績は皆分ってますよ。だから皆はあなたに休みをさし上げたいんですよ」「休み？」「あなたは働き過ぎです。当然休まなければ」「もう結構、俺も年だよ。領導は世襲制ではないしやめても食うには困らない。ところが昔は……」王支書は既に何度も聞かされた話を適当に躲して何老十を十字路まで見送ることにした。別れを告げる時王支書は後悔と慚愧の念に捉われた。「これまでのようにこちらの推薦候補者に投票させればよかったんです。ああ私としたことが……」「とんでもない」何老十は王支書の手を固く握りしめて感涙を滴たらせながら彼がこれまでしてくれた事柄を暖く思い出し、1票はきっと王支書が投じてくれたものと確信した。彼以外に誰がいよう。だから口ではもう村政にはタッチしないと言ったが、やはり彼を助け支えてやらねばなるまい。まだ若い王支書に何10年も続いた何家坪の栄光を傷つけさせてはならない。俺が後見をしてやろう。

考え考え歩いているうち川辺に出た。投票にくる人が足を濡しては冷たかろうと、今朝早く年末の身を切るような水中に入り、皆が渡り易いように石を並べた。凍えそうになっている何老十

を見て人々は「そうやって善根を施してこそ共産党だ」と笑うので、その機に乘じ「これしきのことを！もしも旧社会ならば……」と言いかけると「もしも旧社会ならば真冬に凍りつきながら地主を背負って川を渡らされたもんだ……だろ？」と大笑いして行ってしまった。

人々の嘲笑は何老十の心につきささった。彼は次第に腹が立ってきた。旧社会の苦しみに対する人々の蔑視は、即ち彼に対する蔑視である。彼は歯を食いしばり心ひそかに毒づいた。惜しむらくは旧社会があまりにも早く終ってしまったことだ。あいつらにも当然旧社会の牛馬に等しい生活を体験させるべきだった。踏石を見つめながら彼の心は今朝石を運んだ時よりもっと冷えていた。

「老十さん」震え声が彼を呼んだ。焚木を背負った張五ばあさんだった。「皆がおらと同じようにあんたに投票すると思ったに、本当に恩知らずだよね」張五ばあさんは早く夫に死別し一人息子小成と暮していたが、ある夏洪水の河中で溺れかけていた小成を彼は危険を顧みず助けたことがある。当然のことながら彼女は深く感謝し小成を何老十の養子にした。「もしもあの時小成が死んでいたらおらも生きちゃいない。だからあんたはふたりの命を救ってくれたんだよ。たった1票だけどあんたの為なら命だって惜しくないと思ってるよ」「分ってるとも。泣きなさんな。気持だけで十分だからよ。1票、ありがとうよ」彼は張五ばあさんの籠を持ってやりながら聞いた。「ところで小成の具合はどうかね？」「お蔭様で。よい薬も出てきたし……」「ああ」何老十は深いため息をついた。

小成は高卒後畑仕事の傍ら大工の技術を身につけ、少い材料、短い時間で出来る新しい型の家具造りに精を出し、人々はそれを争って買い求め、2年ほどの間にかなりの貯金ができた。彼は薬屋根の家を瓦葺きに建て替えそれから嫁を貰って楽しく暮すつもりでいた。そこへ降って湧いたのが割尾巴（\*資本主義のしっぽを根絶やしにする）運動で、すべて副業を持っている人はそれで得た収入を罰金として没収されたうえ、見せしめのため引き回されることになった。

何老十は一生を革命に捧げてきたのに義理の息子の不始末は党に対し申し訳ないと、小成の自覚を促し、率先して罰を受け1日も早く革命の路線に戻るよう説得に行く。小成は自分の目標を粉碎され食事すら喉を通らず、ふせっているところに義父がやってきたので自分の気持ちを滔滔と述べたが、それを聞いても何老十は冷たく「若者は理屈ばかりで物事の本質が分っていない。ただか何年間かインキをなめたくらいで何が分かるか、俺は何10年もかけてやっと分ったんだ。一番大切なのは貧しいということ。この世は貧しい人の天下、貧しさこそが最大の真理だ。お前も早く罰金を大隊におさめるんだ」と言いおいて帰る。

目を真赤にして怒っている小成を、母親は命の恩人の言うことだからと慰めるが「命を救ってもそれを生かさないのなら、救わなかった方がましだ」と小成は承服しない。

張五ばあさんが遂に貧窮と屈辱を手に入れ、小成が何年もかけて自分の才覚と労働によって得たお金を没収されたうえ、破廉恥犯達と一緒に街を引き回されるのを、何老十は手伝った訳である。それ以後小成は気がふれ、張五ばあさんも人知れぬ涙を流さなければならなかったが、暮しの手段を失って毎年生活保護を受けるようになり、貧しいが汗して働く必要がなくなったのと引

換えに心の平安を得たのである。

いま何老十がまた小成の病気を持ち出した時、彼女はこの平安が再び乱されるのかと恐れたが、何老十の打ちしおれた表情を見、「そんなに落ちこむこともないよ、この世は利口者より馬鹿でいる方がずっと幸せさ、馬鹿には馬鹿の幸せがあるもんさ」と慰めるのだった。

張五ばあさんと別れて帰る道すがら「おじさん、ずいぶん探したよ」と何双喜に呼びとめられた。「おじさんは僕の入党の紹介者だし、入党は僕に第二の命をくれたも同じ、だからおじさんに投票したんだよ」またもや1票。かくして出会う人は口々に「あなたに投票した」という。彼のしてくれたあれこれに対する感謝の言葉とともに。彼は近隣の領導連を思いうかべた。本建築の家を建てた者、コネで身内をよい所に就職させた者、汚職したり権力を笠に着る者、誰ひとり自分のように潔白な者はいない。なのに彼らは安泰で自分は失脚した。なぜだ？ 帰路出会った20人近い人々は皆鼻をすすり上げながらあなたに投票したという。誰も嘘をついているようには見えないし、彼をからかっているとも思えない。

考えれば考えるほど頭が混乱してくるので早く帰って休もうと家に近づいた時、やってくる妻の姿が目に入った。彼にとって妻は家事をする機械——命じさえすれば動き出すロボットに過ぎず、思想や感情を持つ存在とは思ったことはない。それでもかつては愛情を持ち合った時もあるのだが、20年前のある出来事以来ふたりの間は冷えきってしまった。その秋(\*急な集団農業化などの原因で生産力が落ち、大災害にも見舞われ 150万以上の餓死者が出た60年頃か) 食堂はすでに材料がないため機能を停止し何日も欠食が続き(\*個々の炊事は認められなかった) 何老十は黄色い冬瓜のようにむくんだ顔になった。妻も同様だったけれども夫の身を気遣う彼女はやっとの思いで僅かな唐黍を手に入れ、石で潰し摘んできた野草とともに洗面器で雑炊を作った。自身の狂おしいまでの食欲を押さえ1口の味見すらせず、夫第一、つぎは子供、自分は最後と我慢した。夫は力なく帰宅すると坐ったまま肩で息をし冷汗を浮べており、急いで妻がさし出した唐黍粥をががつと呑みこんだ。妻は自分が食べるより嬉しくそれを見ていた時、急に気づいた夫が訊ねた。「この唐黍はどこから持って来た？」そんなこと、まさか天から降ってきたとも言えまい。答えられない妻に手中の碗を投げつけると、雑炊の入った洗面器を大隊に持って行き涙とともに彼は自己批判した。妻が盗みを働いた、党と人民に対し申し訳が立たない。そして彼自身の音頭で1晩中妻の吊し上げ大会を行った。それ以来妻は彼を恐れ可能な限り近づかず、他の人とは話したり笑ったりしても、夫とは必要最小限の接触しかしなくなってしまった。

今、妻は急に大胆に夫を正面からじっと見据えた。何か言いかけてやめ、ただ「30年もやったんだからもういいじゃありませんか。さっき私が入れなかったらたった1票だったわ……」と泣き声で言いながら行ってしまった。彼は急に妻の長所を発見した。何10年も文句も言わずじっと耐えてきた妻。他の領導の妻達のように夫の足を引っぱったり夫の勢力を笠に着たりなど一度もしない。それどころか彼女の病気治療の為実家の弟が送ってきたお金さえ、彼が取り上げて張五ばあさん母子にやってしまった時も何も言わなかった。

何老十はやっと家に帰りついた。ぼろぼろの家、旧社会の貧しい農家と変りはない。ただ入口

の所に“模範家庭”と大きな字で書かれた額があるのだけが現代風である。“修正主義に反対する”運動が盛り上っていた当時この家は全県の幹部が訪れた聖地だった。彼らは何老十の家の貧しさを見て涙を流しながら、その私心のなさをこれこそ修正主義に反対する模範家庭！とほめたたえたのである。何老十はそこに立ちつくしたまま、堪らない孤独感を覚えた。

家に入った時、喉の喝きを感じたが動きたくない。誰か呼ぼうと思った途端隣室からくすくす笑う声が聞えた。何をしているのかは見えないが見えなくて幸い、隣室は息子夫婦の部屋、壁中に映画スターの写真を貼った別世界で、嫁の秀花は新しい服を着、中ヒールの靴を履き、息子の苦根と楽しんでいる。息子は美しく粧った新妻を人に見せびらかしたいののだが、何老十が若い嫁のおしゃれを絶対に許さないで2人は時々部屋の中でこうしてこっそり気を紛らわしている。父が戻ったのに気づいて若夫婦は慌てて着換えて出てくる。「お父さん、喉が喝いたでしょ」と嫁はお湯をつぎ息子がそれを父のところに運んだが、父が受けとらない為ひっこみがつかず——世の中の動きも考えず皆の足を引張ってばかりいるんだから落選するのが当然だよ、このお湯をぶちまけてやりたいよ——と思う。嫁は父子の雲行きが陰悪なのを見てとり、あれこれとりなそうとするが何老十の不機嫌は直らない。

苦根が口火を切った。「とっくの昔から家の者はやめるように言ってたのにおやじが聞かないからじゃないか。誰がおやじみたいなやり方する？いつも仕事仕事で1晩だってゆっくり寝たことないし、落着いて飯1回食ったためしもないじゃないか。皆の為になって家族は全く犠牲にしてどういうつもりだよ。なのにさっき俺と秀花の2票がもしなかったらいったいどうなったと思うんだよ！」

「馬鹿もん！お前まで俺をからかうのか、お前達が俺に投票しただと？あのうちの1票は俺が自分に投票したんだ」何老十の不満は遂に爆発した。自分の部屋に駆けこみベッドに倒れると涙がとめどなく溢れ続けた。

何老十（\*何家で10番目に生れたことを意味するが）の老十は老实（\*まじめ、正直、とろいの意）と同音、寓意であろう。

舞台は農村だが、30余年の中国社会の動きが描かれていて興味深い。社会主義は人類社会の歴史の止揚であると聞かすが、実際に運用する人が何老十の如く権威に無条件に従う奴隷根性の持主であれば、比較の基準が常に旧社会であって、更なる発展を考えず、解放に導いてくれた対象への感謝が盲信となり、ドグマとなっているのに気づかず、発展の芽や現状改革の動きはすべて資本主義的としか映らず、叩き潰すことに狂奔する。このような人間を模範とする時期が確かに存在したし、現在も完全に払拭された訳ではない。

そして恐ろしいまでの形式主義。何老十を例に挙げれば彼の妻や子に向ける面は全く問題にされず、貧しい服装、貧しい家構えだけで模範人物、模範家庭と評価される。このような環境で精神の荒廃を招かない訳がない。従って人々の面従腹背ぶりも、理念の押しつけが理念の形骸化を生み出すさまを映している。



中国の人々はモデルを好むように見受けるが、あるべき社会主義的人間像の確立が時に恣意的で、権力の座につくと旧社会の皇帝や地主の型を採用、或いは無批判な忠臣型に陥り、いずれも現代化の桎梏となっていることを上記2作品は告発している。

#### 引 用 作 品

秋天的憤怒 張 煒      〈当代〉1985年第4期  
1985年中篇小説選第2輯 人民文学出版社版より

滿 票 喬 典運      〈奔流〉1985年第3期  
1985年短篇小説選 人民文学出版社版より

\*は筆者注